

令和6年3月4日

京口門だより No. 125

今年に入って冬というのに暖かかったり急に寒くなったりと不順ですし、地震なども多く発生しているように思えます。3月3日のひな祭り前後も寒波に見舞われました。季語では冴返る、余寒、春寒などといっています。

「雛櫃に綿入るる日は余寒かな」(麦水)

さて、未だに漢方薬は訳の判らない成分の薬であって、そんな薬を信じて飲むのは止めたほうがよいというような言動をする人がいるようです。それはもう半世紀前の人たちの言った言葉で、今日すこし学んだ人はそのような事を言わないでしょう。私も五十年くらい前に医学部の大学院に入学する時に口頭試問があり、「大学院で漢方薬の研究がしたいと」試験官の教授の前で発言したら、「君そんな訳のわからない物の研究は実績として意味はないよ」と否定されたことを経験しました。「いやそんなことはありません。漢方生薬の成分や薬理作用はかなり明らかにされています」と反論してあきれられたことがありました。その当時でも、例えば漢方薬でよく使用する朝鮮人参(じつは栽培された薬用人参)の成分は、ニンジンサポニン Ra, Rb…などを見いだされ、疲労回復作用、血糖改善作用、鎮静作用などの作用もあきらかにされていました。私の友人は黄疸を治す漢方薬の茵陳蒿(カワラヨモギの花穂)にはカピラリジンという物質が含まれており、これは胆汁分泌を促進する作用があることをみつけました。また正倉院薬物として保存されている甘草(マメ科植物の根)という生薬にはグリチルリチンというサポニン類やフラボノイド類の成分が含まれ、潰瘍を治す作用、抗炎症作用、解毒作用などあることが判っています。

前にも述べたことがあります。この甘草と芍薬を合わせた芍薬甘草湯には芍薬の筋肉収縮作用と甘草の筋肉弛緩作用の相反する作用をもちながら、二つを合わすと強力な筋肉の痙攣抑制作用があることが細野診療所の研究で明らかになりました。また漢方薬の抗ガン作用も明らかになりつつあります。

こうした多くの漢方薬の成分と薬理作用をまとめた書物も出版されて、誰の目にも見られるようになっていきます。どうか漢方薬は訳の判らない薬という考えから離れていただき、さまざまな作用をもった薬であることを知ってほしいと思います。しかし、漢方薬は複雑な組み合わせで成り立っていますので、まだまだ研究しなければならないことは山積しています。

